

## 八木健に学ぶ滑稽俳句 13

高橋 素子

大言海割って字を出す稿始め

鷹羽狩行

紙魚と生れ大言海を泳ぎゐる

八木健

この四月八日、二〇一四年の本屋大賞が発表され、和田竜氏の「村上海賊の娘」（新潮社）上下巻一〇〇〇ページ近い超大作が第一位に輝いた。

古来、幾人もの学者・歌人たちが「言葉の海」に漕ぎ出しては、その深さ広さに茫洋たる思いを抱いてきたが、これらの歴史を踏まえ、辞書（舟）を編集する（編む）人たちの、言葉と人への愛を謳う感動の物語、「舟を編む」（三浦しをん著・光文社）が、一昨年の本屋大賞には選ばれ、昨年には、映画化された。

この原作の小説「舟を編む」は、我が国最初の本格的国語辞書「言海」（大槻文彦著）、その増補改訂版「大言海」に因んで、「大渡海」と命名された辞書の魅力に取り付かれた人々が、悩み、戸惑い、喜びを分かち合い、時には恋をし、静かで確かな情熱を日々にそそぐ、人間賛歌の物語であり、人と人との思いをつなぐ言葉の大切さ・面白さを十分に教えてくれる物語でもある。

掲出の二句は、それらの歴史の重荷に圧せられることなく、言葉を自由に駆使した見事な十七音字の名句であると言っても過言ではない。

「大言海」その言葉の大海を小さな紙魚が泳いでいると、師・八木健は洒落ている。「大言海は俳壇という海、紙魚は俳人ですね。『井の中の蛙大海を知らず』という諺にも似て、溺れそうになりながら健気に泳ぐ。俳句は対象に自分を重ねて詠むものです」と、師匠は笑った。見事な滑稽句である。

今回も古今の名句と師匠・八木健の句を比較して滑稽句の学習を深めて行きたい。

鷗外も茂吉も紙魚に食はれけり                      藤田湘子

窮屈をものともせず紙魚の恋                      八木健

掲出の湘子の句に思わず笑ってしまった。一瞬、森鷗外や斉藤茂吉本人が、本当に紙魚に食われているような錯覚に陥って笑止不可能。成る程と納得させられる機智的言語遊戯の名句である。

師・八木健の句もまた面白い。狭い書物の中という劣悪な環境の中で、書物から得た恋愛術を駆使して、素晴らしい恋のかけひきを…、ならば、人間も紙魚を先生にして等と、想像していると楽しくなってくる。対象の緻密な観察・写生に、機智・遊び心を加えて上質な滑稽句は生まれてくる。

師匠に倣って、私も「紙魚」を詠んでみる。

古書好む紙魚も私も本の虫

平家から源氏の古書へ紙魚走る                      素子

紙魚だって「勝ち馬に乗る」ことを、逆に本の中で人間から学んだに違いない。

紙魚のあとひさしのひの字しの字かな      高浜虚子

紙魚と生れ活字離れの出来ぬかな              八木健

虚子の句は、久しぶりに紐解いた書物なのであろうか、紙魚が食べた痕がひさしのひの字の形になっている。「虚子は、駄洒落が結構好きだったようですね。紙魚の食ったのは昨日今日の事じゃないから、その意味でもひさしのひの字・しの字というわけですね」と、師は語る。

紙魚は海老の様な形の銀白色の小さな虫で、それ故「紙魚」と名付けられたが、書物などを食い荒らす。掲出の師匠の句は、活字の一杯書かれた本を食べ、年中、本の中で暮らしているから「まるで本の大好きな勉強家の様で、活字離れが出来ない」との面白い見方で、機智的滑稽句の佳句となっている。

繭かけて思ひまどへる蚕あり                      篠田悌二郎

丑三つや蚕は繭に閉じこもり                      八木健

繭は蚕が一本の糸で築き上げる芸術作品であるが、人間が繭から生糸を作るために、蚕は繭の中で煮られ、死んでしまう。蚕は本能的にその事が

分かるのだろうか。作者は、思い惑えるかのように繭を築き上げる蚕に優しい視線を投げかけている。

師・八木健の句は、丑三つ時、今の午前二時ごろ、真夜中である。丁度その時刻に、蚕は繭を完成する事が出来た。その姿にほっとしているのは、お化けが怖くて隠れたがっている作者自身である。蚕に自らの姿を重ねて滑稽句の佳句となった。

蓑虫の父よと鳴きて母もなし                      高浜虚子

蓑虫に聞かれてをりし立ち話                      八木健

虚子の句は、蓑虫の鳴き声をチチヨと聞いて、蓑虫は蛾の幼虫で、生まれながらにして母の顔を知らない。ましてやチチヨと鳴いても、父の顔など知るはずもないという意の地口の句である。「地口は説明したらつまらない。自分で感じ取るものです」と、師匠は語る。

師・八木健の句は、誰も他にいないと、安心して噂話など立ち話を始めたが、ふと気がつくと、糸を垂らした蓑虫が可笑しそうに、蓑を揺すっている。

「壁に耳あり障子に目あり」である。聞かれてしまったと思う瞬間の心の慌てぶりを、師・八木健は、上手に滑稽句に詠んでいる。